



Title	雑誌『少年園』と森鷗外の翻訳
Author(s)	中, 直一
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 9-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77058
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

雑誌『少年園』と森鷗外の翻訳

中 直一

1 はじめに

森鷗外は、少年向け雑誌『少年園』に翻訳を2篇掲載している。ひとつはアルフォンス・ドーデの「従軍僧」(Alphonse Daudet, *Der Feldprediger*)を訳した「戦僧」で、『少年園』第10号に掲載された。もう一つはワシントン・アーヴィングの「リップ・ヴァン・ウィンクル」(Washington Irving, *Rip van Winkle*)を訳した「新世界の浦島」(後に『水沫集』に再録された際に、「新浦島」と改題)で、『少年園』第13号から7回にわたって掲載された(明治22年〔1889年〕5月～8月)。いずれも独訳からの重訳である。

「戦僧」の内容は、敵軍の捕虜となった少年兵士が、最後まで寝返りを拒否して悲劇的な死を迎えるという、「少年の義士」の物語である¹。他方、「新世界の浦島」は、アメリカを舞台にした物語で、そのタイトルから推測されるように、一晚の眠りから覚めた主人公が、実は森の中で20年眠り続けていたという、お伽話めいた物語である。両作品ともに内容の面から判断すると、少年雑誌に掲載されるにふさわしい物語であると言えよう。

この両作品のうち、筆者はかつて、鷗外訳「新浦島」(鷗外全集所収版²)と、その翻訳底本である鷗外文庫所蔵本 Irving, Washington, *Rip van Winkle*. In: *Washington Irving's Skizzenbuch*. Uebersetzt, mit Biographie und Anmerkungen herausgegeben von Karl Theodor Gaedertz, Leipzig (Reclam) o. J. (刊年無記)を対比し、鷗外がどのような翻訳技法を用いていたのかについて連続研究をなしたことがある³。この連続研究においては、鷗外の日本語訳と翻訳底本であるドイツ語文の対比調査が眼目であったが、正直に申して、鷗外の訳文で使用される漢字・漢語には難読のものがかなりあり、筆者はドイツ語文との対比調査以前に、漢字の読みを確認する為に相当の時間を費やした。

先に述べたように、鷗外の訳文の初出は、少年向け雑誌『少年園』であった。訳文において鷗外が使用する漢字・漢語を目にすると、これを当時の少年たちがどの程度読みこなせたのか、という疑問が生じる。明治期の少年読者は、現代人と異なり、相当難解な漢字・漢語も使用し、また読みこなせたであろうことは想像に難くないが、それにしても鷗外の漢字使用は難解に過ぎるのではないか。

上記の連続研究をなした段階では、筆者は『少年園』に掲載された「新世界の浦島」を入手できず、岩波版全集に収められた「新浦島」の形でのみ、鷗外の訳文を検討した。『少年園』に掲載された鷗外の訳文は、後に彼の創作小説や翻訳を収めた『水沫集』に再録され(明治25年〔1892年〕)、その際に標題は「新浦島」に変更となった。標題の変更のみならず、字句に関しても、多少変更された部分がある。現在岩波版鷗外全集に収められた「新浦島」は、『水沫集』の改訂版である『改訂水沫集』(明治39年〔1906年〕)に掲載されたものを底本としている。また岩波版全集の「後記」には、初出である『少年園』掲載版「新世界の浦島」との異同も記されている⁴。

そのようなわけで、筆者は全集版のみを見ることを以てよしとしたわけであるが、この度『少年園』復刻版を見る機会を得て、全集版との異同をチェックしてみると、様々なことが分かってきた。本論文では、鷗外の訳文の漢字・漢語使用が、当時の少年読者にどの程度理解されたのかを知るため、『少年園』が想定していた読者層の何たるかを知るべく、『少年園』に掲載された記事を分析する。次いで「新世界の浦島」および「戦僧」について、初出と全集版を対比することにより、何が見えてくるかを検討したい。なお、本論文は鷗外の翻

¹ 「少年の義士」という評価は小堀桂一郎『森鷗外文業解題(翻訳篇)』(岩波書店、1982)による。

² 本論文においては『鷗外全集』第1巻(岩波書店、1971)を使用し、単に「全集版」と記す。また同全集より引用を行う場合は、出典ページを本文中に括弧に括って示す。「新浦島」、「戦僧」いずれも第1巻所収である。

³ 「新浦島」に関する筆者の既発表論文のリストは、本論文末尾に掲げる。

⁴ ただし、ルビの異同は記されていない。

訳との関連で『少年園』を考察するので、鷗外の翻訳が掲載された前後の同誌第1号から24号を分析の対象とする。『少年園』からの引用は『復刻版少年園』（不二出版、1988）により、引用箇所等を本論文中に号数とページ数を括弧に括って示す⁵。またそれぞれの号の発行年月日については、本論文末尾の「付表等」を参照。

2 少年園の読者層

2-1 懸賞文題にみる少年園の読者層

『少年園』創刊号となる第1号には「懸賞文題」というタイトルの、懸賞作文を募る記事が掲載されている⁶。この記事には、応募資格が書かれていて、そこから『少年園』編集部がどのような読者層を想定していたかが分かる。

「懸賞文題」には3つの課題がある。第一の文題では「雪中行軍ノ記」という標題のもとに作文を寄せることが課題となっていて、応募資格として「右は尋常中學生徒に限る、文體は思ふまゝにてよし」との付帯条項が記されている。第二の「游學せる友に贈る文」には「右は高等少學生徒に限る」、そして第三の「少年園ヲ讀ム」には「右は何人にてても寄草することを(マ)得」との注記がある(第1号表紙裏)⁷。つまり『少年園』の読者層としての「少年」は、主に高等小学校の生徒及び尋常中学校の生徒であることが分かる。このような傾向は、半年後の『少年園』第13号の「第二回懸賞文題」でも引き継がれ、第1号と全く同じ応募資格が記載されている⁸。

それでは、高等小学校の生徒、あるいは尋常中学校の生徒とは、実際にはどのような人々であったのであろうか。当時の教育システムを調べると、『少年園』第1号発行の明治21年の段階では、明治19年の学校令(小学校令、中学校令等の総称)による制度のもとにあり、その制度においては、尋常小学校→高等小学校→尋常中学校→高等中学校→大学という進学コースになっていた⁹。最初の学校である尋常小学校(修業年限4年)の学校数は、『少年園』が創刊された明治21年段階では25,953校、児童数2,927,868名であった¹⁰。高等小学校(修業年限4年)の学校数・生徒数は、残念ながら『学制五十年史』に記載はないが¹¹、さらにその上の尋常中学(修業年限5年)に関しては、明治21年の段階で、学校数49校、生徒数10,441名である¹²。学校数で比較すると、尋常小学校が各府県の市町村レベルに設置されていたことが推測される一方、尋常中学が全国で49校ということは、各府県あたり1校程度の設置にすぎなかったことが分かる。また、児童数・生徒数に関して、尋常小学校の児童数と尋常中学校の生徒数を1学年あたりで比較すると、尋常小学校731,967人対尋常中学校2,088人となり、大雑把な計算だが、尋常小学校から(高等小学校を経て)尋常中学校に進学するのは、350人に1人の割合となる。尋常小学校の学校数・児童数と比較すると、尋常中学の学校数・生徒数がいかに少なく、尋常中學生徒がエリート的な存在であったかが分かる¹³。

⁵ 『少年園』において変体仮名が使用されている場合、本論文では変体仮名を通常の平仮名に直して引用する。

⁶ 第1号に引き続き、第2号(明治21年11月18日発行)および第3号(明治21年12月3日発行)にも全く同じ募集記事が掲載されている。このことから、1ヶ月半にわたって募集が続けられていたことが分かる。

⁷ なお、「懸賞文題」では、同じ記事の中で漢字と片仮名の組み合わせと、漢字と平仮名の組み合わせが混在しているが、引用に際してはその不統一のままに記載した。

⁸ 『少年園』第13号表紙裏。なお『少年園』の表紙には第1号から第12号までが第1巻と記され、第13号からは第2巻となっている。

⁹ 『学制五十年史』(文部省、1922)p.133。

¹⁰ 『学制五十年史』p.153。

¹¹ 高等小学校の学校数、生徒数については『学制百二十年史』(ぎょうせい、1992)にも記載はない。

¹² 『学制五十年史』p.169。

¹³ 明治19年の中学校令では、尋常中学校の上に高等中学校が設置されたが、その入学資格年齢は17才以上となっている。第一高等中学校以下、所謂ナンバースクールは明治19年の時点で東京、仙台、大阪(のちに京都に移転)、金沢、熊本の5校、その他に山口高等中学、鹿児島高等中学造士館があった。高等中学校は1894(明治27)年以降、高等学校(旧制)となる(『学制五十年史』pp.178-179)

日本でこのような教育制度が成立していた時代に発刊された『少年園』であるが、懸賞文題への応募状況について、第4号において、応募者の総数が記されている。それによると、尋常中学生徒向けの文題には237篇、高等小学生徒向けの文題には1,721篇、そして限定なしの文題に2,403篇の応募があった旨記されている（第4号表紙裏）。

一方、『少年園』の発行部数については、『少年園』創刊号に「少年園は既に今日の初刊に於て一萬二千の冊子を印刷し、一萬二千の園友諸君と初て相見の榮を得たり」（第1号 p.3）という記載があり、公称12,000部の発行部数を誇っていたことが分かる。当時の日本の人口については、『少年園』第1号に掲載された「天長節を祝し、開園の緒言とす」（創刊の辞に相当）において「我々日本人三千八百萬の人民」（p.1）という表現があることから、当時の人口が3,800万人と見られていたことが分かる¹⁴。

このような全人口の中で、尋常中学校生徒数は5学年あわせて1万人を僅かに越えるのみであるから、『少年園』の読者層が、相当なエリート層であったことが推測しうる。

2-2 応募者および投稿者にみる少年園の読者層

前項で見たように、『少年園』の発行者は、高等小学校生徒および尋常中学校生徒を主たる読者層と想定していたが、実際にはどのような「少年」たちが読者となっていたのであろうか。このことを解明するために、上記の懸賞文題への応募状況および、読者の投書欄を分析する。

『少年園』第1号の懸賞文題への応募状況は上に記したが、このなかで特に注目したいのは、資格を定めなかった文題への応募者2,403名である。応募者の内訳は残念ながら記されていないが、優秀作として掲載された3本の文題のうち1本には、応募者の氏名のみならず、所属を示唆する「第三高等中學校寄宿舎」という住所が添えられている（第5号懸賞文題 p.15）。つまり、尋常中学の上の、高等中学の生徒も読者となっていたことが分かるのである。

次いで、読者からの投稿欄を分析する。『少年園』には、第2号より付録として読者からの自由投稿欄が設けられていた。投書というより、自分の作文を投稿したという趣の内容の文章が多い。そこには、投稿者の所属学校を記したものがある。例えば第2号には11名の投稿が掲載されているが、記載された所属を見ると「高等師範學校附属小學」が6名（「高等科二年級」3名、「一年級」2名、「女兒第七年級」1名）、「府下公立城東小學校高等第三年級」1名、「上總國山邊郡大綱尋常小學校」1名（学年は記されていない）、「新潟縣三條校生」1名、所属の記載がないもの2名となっている（第2号付録 pp.1-4）。

高等小学校の児童が多いが、1名尋常小学校児童の投稿があり、懸賞文題の投稿条件から推測されるよりも、より幅広い読者層が存在していたことが分かる。また女子の投稿があったことも注目される。第3号でも「東京高等女學校一年生」及び「同四年生」の2名が投稿文を寄せている（第3号付録 p.1）。そして、「懸賞文題」においても、第21号では「女子懸賞文題」の募集があり、そこには「これは女子に限る懸賞文ゆゑ、男子は寄草するを得ず」（第21号表紙裏）との但し書きがある。

第4号以降の投稿者を調べてみても、概ね高等小学校の生徒が多いが、たとえば第6号付録 p.1には「第一高等中學校」の生徒、第8号付録 p.2以下には「第二高等中學校生」の投稿文が掲載されており、後の（旧制）高等学校の生徒、今で言う東京大学や東北大学の1,2年生に相当する学生からの投稿があったわけである。先に見たように懸賞文題には第三高等中学の生徒からの応募があり、一般投稿とあわせて考えると、『少年園』が、尋常小学校児童のみならず、当時のエリート層にあたる高等中学生をも読者層として有していたことが分かる。

2-3 掲載記事にみる少年園の読者層

『少年園』の記事の内容は多岐にわたる。たとえば、鷗外の「戦僧」が掲載された第10

¹⁴ 『少年園』第6号に掲載された「日本人」と題した記事の中にも「吾々三千八百萬人の總名を取りて自ら題したる『日本人』ハ……」（第6号 p.27）という表現がみられる。

号には「火山の話」という理科読み物もあれば、「新井白石の傳」といった偉人伝、あるいは「大學紀念祭」や「慶應義塾の改良」等の高等教育機関に関する記事も見られる。

こうした記事のうち注目すべきは、高等教育機関の紹介記事である。『少年園』の編集者が、どの年齢・学歴の少年少女を読者層として想定していたかを知るには、同誌においてどのような学校が紹介され、またどのような進学関係の情報が提供されているかを分析することが至便であろう。

『少年園』で紹介されている高等教育機関は、たとえば次のようなものである（同じ学校が二度にわたって、別々の記事で紹介されている場合もある）。

官立の学校では、帝国大学〔後の東京帝国大学。東京大学の前身〕（第16号 pp. 20-21）、第一高等中学〔後の一高等学校。東京大学教養学部の前身〕（第16号 pp. 21-23）、高等商業学校〔後の東京高等商業学校。一橋大学の前身〕（第20号 pp. 18-20）、東京英語学校〔後の東京外国語学校の一部。東京外国語大学英語科の前身〕（第5号 p. 25 及び第14号 pp. 25-26）、高等女学校〔後の東京高等女学校。東京女子師範学校の付属校で、お茶の水女子大学付属高校の前身〕（第6号 p. 26 及び第14号 pp. 22-24）、東京農林学校〔東京大学農学部の前身〕（第6号 p. 26）。

公立では、東京府高等女学校〔後の東京府第一高等女学校。東京都立白鷗高等学校の前身〕（第7号 pp. 26-27）が掲載されている。

また私立では、慶應義塾（第7号 pp. 21-25）、東京専門学校〔早稲田大学の前身〕（第18号 pp. 21-23）、工手学校〔工学院大学の前身〕（第24号 pp. 15-17）、東京仏学校〔法政大学の一つの前身〕（第6号 p. 26）、東京法学校〔法政大学の一つの前身〕（第6号 p. 26）、共立女子職業学校〔共立女子大学の前身〕（第19号 pp. 17-18）等が見られる。

こうした高等教育機関の他、高等中学に入るための予備学校についても、「高等中學に入る豫備學校の大なるもの三あり、一を共立學校と曰ひ、一を成立學舎と曰ひ、一を東京英語學校と曰ふ」（第21号 p. 17）と、高等中学の受験生を読者層として意識していることをうかがわせる紹介記事も掲載されている。この記事で述べられている「共立學校」（きょうりゅうがっこう）は現在の開成中学・高校の前身であり、「東京英語學校」は前述の一橋大学の前身の官立学校と同名ではあるが別の学校で、現在の日本学園中学・高校の前身である。「成立學舎」は後に廃校となっている。

また『少年園』では、入学試験が近いことをアナウンスする「諸學校の生徒募集」という記事があり、そこでは、第一高等中学をはじめとする各高等中学校や東京職工学校（後の東京工業学校。東京工業大学の前身）、東京音楽学校（東京芸術大学音楽学部の前身）、東京高等女学校といった官立学校の他、英吉利法律学校（中央大学の前身）、工手学校等の私立学校の校名を挙げた上で、入学試験が迫っていることを告げ、「有志の方々、油斷し玉ふな」と結んでいる（第17号 p. 19）。

こうした学校情報・入試情報の他、『少年園』には、読者が進学を希望するであろう高等教育機関の近況を知らせる記事もある。例えば「大試験の廢止」という記事では、「今度帝國大學第一高等中學校其他總ての文部省直轄學校にては、學年試験を全廢し、生徒の及第落第は總て平常の採點を以て定ることになるべしといふ」（第11号 p. 28）と、第一高等中学校等で定期試験廢止・平常点評価の方向が定められた旨を伝えている。また「高等中學の佛教會」という記事では、第一高等中学の生徒の間で、仏教を研究するサークルが出来たことを報じている（第15号 pp. 25-26）。

その他、学校紹介というよりは、各学校のトピックスも紹介されている。上に触れた「大學紀念祭」は、帝国大学令發布3周年を記念して、当時の帝国大学内で行われた式典の様子を伝える記事である。他にも第12号には、帝国大学や高等商業学校（先に述べた東京高等商業学校）、共立学校におけるボート大会の様子を伝える「端艇競漕會」という記事があり（第12号 pp. 27-28）、続く第13号にも「高等中學の競漕會」という紹介がある（第13号 p. 28）。

さらには、第一高等中学で長年教員を務めた外国人教師の訃報を伝える「ストレンジ君逝く」なる記事もある（第18号 p. 24）。

日本国内に止まらず、『少年園』には「米國に留學せんとする者の爲に」という記事が掲

載されたこともある（第9号 pp.19-20）。当該記事は、『東京日日新聞』に掲載された記事を抜粋の上再録したものであるが、米国に留学する際に要する学費や生活費の概要が記されている。

ここまで見たように、『少年園』で紹介されている学校は、東京のものが殆どである¹⁵。このような編集方針の理由は、先に触れた『少年園』創刊の辞に示されている。そこでは、東京と地方のそれぞれの長所を述べた後、『少年園』創刊の趣旨が「都下の少年と地方の少年を相會せしめ、是より長く懇親の端を開きて此の少年園の園友たらしめんと希望したるに在り」（第1号 p.2）と述べている。また「游學の栞」欄の最初のもので掲載された『少年園』創刊号には、地方に住む少年たちが東京の諸学校の実情を知る機会が少ない現状を述べた後、同欄の目的を「地方に在る少年諸子の爲めに圖るには、東京の有様就中中學校諸塾の有様を報道し（マ）、入學の手續學課の程度教員及び時間の事より、出京の始め下宿及び寄宿の模様まで、成る可く詳密に成る可く公平に叙述して、眞面目を知らしむることは最も必要の事なるべし」（第1号 p.22）と記している。「游學の栞」の欄にも見られるように、『少年園』は、地方の少年が上京して東京（あるいはその近県）の高等教育機関に学ぶ為の一助たらしめとする編集方針を持っていたようである。

2-4 小括

以上の分析により、『少年園』の読者は、高等中学等の受験を考える尋常中学校生徒や高等小学校生徒が中心でありつつ、既に高等中学に進学を済ませた生徒も読者である一方、高等小学校進学を目指す尋常小学校の児童もいたことが分かる。いずれにせよ、当時の相当なエリート層・高学歴層の少年少女が『少年園』の読者層であったことが分かる。

3 『少年園』掲載文の文体

以上検討したように、『少年園』の記事を分析することにより、その読者層がどのような層の人々であったかが推測されたが、これとは別に、『少年園』に掲載された文章の文体も検討に値する。

『少年園』に掲載された鷗外の翻訳のうち、「戦僧」は文語体で記され、「新世界の浦島」は言文一致体で書かれている。筆者は、「戦僧」を読むより先に、鷗外全集の「新浦島」に接していた。その時筆者は、少年向け雑誌であるから鷗外は言文一致体を採用した、と考えていた。もしこの推測が正しいのであるなら、『少年園』の他の掲載文も、その多くが言文一致体であった可能性がある。

ところが、実際に『少年園』に掲載された諸々の記事を読むと、殆どすべてが文語文の文体で書かれている。すでに上に引用した文章も、すべて文語体であった。また『少年園』編集者サイドの文章のみならず、読者からの投稿の文章も、筆者が参照した第1号から24号に関する限り、すべて文語体で書かれている。たとえば、本論文で紹介した第2号における投稿者のうち、最年少と思われる尋常小学校児童の投稿文「少年園の開園を祝す」は、次のような出だしになっている。「夙に文壇に牛耳を執り文名噴々たりし山縣悌三郎氏は這回邸内の一隅を拓き、池を鑿ち山を築き、山には珍木佳卉を栽え、池には錦鱗小魚を放ち、以て少年子弟逍遙の處となし、名けつて(マ)少年園といへり」（第2号付録 p.2）。この尋常小学校児童の投稿文からうかがえるように、読者自体が、かなり漢語を多用した文語文に慣れ親しんでいたのである。鷗外の「新世界の浦島」が、言文一致体でありつつ、難解な漢字・漢語を使用していた理由の一つに、『少年園』全体のトーンと歩調をあわせるということが挙げられるのではないかと推測される。

4 初出「新世界の浦島」と全集版の対比

¹⁵ 例外的に『少年園』第23号 pp.26-28の「少年界の近事」という記事の中で、札幌農学校と第二～第五高等中学の情報が紹介されている。ただし、この記事には、帝国大学、第一高等中学、高等商業学校、東京電信学校（郵政大学校の前身）、東京職工学校、工手学校、専修学校（専修大学の前身）、和仏法律学校、慶応義塾の情報が紹介されており、分量的に東京の学校が圧倒的に多い。

4-1 ルビについて

前節までの箇所では、筆者は『少年園』全体の傾向について、読者層および文体の観点から検討したが、本節では鷗外の翻訳作品の初出における特質を解明したい。

本論文冒頭で述べたように、「新浦島」では非常に難しい漢字・漢語が用いられている。たとえば全集版では、ルビなしで次のような漢字の使用例が見られる。

「蜀黍の莢」(p.169)、「片手で撮んで」(p.170)、「一弗贏け」(p.170)、「閑に緩くり」(p.172)、「觀面に」(p.172)、「栗鼠狩」(p.173)、「假寐」(p.173)、「恍惚と」(p.173)等々。

ところが『少年園』に掲載された「新世界の浦島」では、こうした難読漢字には、多くの場合ルビが使用されている。例えば、上に記した箇所は、初出では

「蜀黍^{しよこし}の莢^{きや}」(第13号 p.12)、「片手^{ついで}で撮^とんで」(第13号 p.13)、「一弗^{まうけ}贏^つて」(第14号 p.15)、「閑^{しづか}に緩^{ゆる}くり」(第14号 p.16)、「觀^て面に」(第14号 p.17)、「栗鼠^{りす}狩」(第15号 p.12)、「假寐^{うたね}」(第15号 p.13)、「恍惚^{ぼんやり}と」(第15号 p.13)

と記されている。

このようなルビの使用を行ったのが、鷗外本人なのか、それとも『少年園』の編集者なのかは、筆者には判断する術がない¹⁶。しかしいずれにしても、初出段階では少年読者向けの配慮がなされていたことが分かる。以上のように、

(1) 初出では存在したルビが『水沫集』以降で欠落するというケースは非常に多く見られる。

ただし、数は少ないが、以下の場合も見られる。

(2) 初出のルビが『水沫集』以降でも保持されている場合

例：悪劇^{いたづら}(第13号 p.12/全集 p.169); 煩聒^{やま}しい(第14号 p.15/全集 p.170)

(3) 初出でルビが存在しないが、『水沫集』以降でルビが振られている場合

例：内証^{うちしめ}(第13号 p.11)/内証^{うちしめ}(全集 p.168); 上は目^{うはめ}(第14号 p.15)/上目^{うはめ}(全集 p.170)

(4) 初出のルビ付き漢字が、『水沫集』以降において平仮名で記載される場合

例：何^{なに}んな(第13号 p.12/どんな(全集 p.169); 支^すけて(第15号 p.14)/すけて(全集 p.174)

(5) 初出と『水沫集』以降で異なるルビが振られている場合

例：周^{まはり}匝^り(第15号 p.14)/周^{めぐり}匝^り(全集 p.174)

また、これらとは若干異なる次元だが、

(6) 初出と『水沫集』以降で、語彙や漢字の異なる場合もある。

例：怠惰^{なま}の徒^た(第14号 p.16)/懶^{なま}けもの(全集 p.171); 垂^たげて(第14号 p.15)/下^{くだ}げて(全集 p.171); 製^{つく}作^て(15号 p.14)/仕^{たく}立^て(全集 p.175)

こうした(2)～(6)のケースも見られるものの、量的には(1)のケースが圧倒的に多く、初出においては、知的水準の高い少年少女の読者向けに難解な漢字・漢語を使用しつつも、他方で読みやすさの便を図ってルビを積極的に使用していたことが分かる。

4-2 段落の相違

全集版の「新浦島」とドイツ語翻訳底本を比較してみると、訳文云々以前に、まず形式的な相違として、段落の数が異なることに気付く。ドイツ語底本では総計58の段落があるが、全集版では50段落である。すなわち鷗外の訳文では、底本で2段落(場合によっては3段落)となっているものを一つの段落にまとめる、等の構成変更がなされている。

¹⁶ 鷗外でなく編集者が元原稿にないルビを振った可能性を排除しきれないのは、読者からの投稿にルビが振られているケースがあるからである。例えば、「新潟縣三條校生」の投稿の中に「枝ニ引ツカケタル竹籬ハ」(第2号付録 p.1)という箇所がある。同人の投稿にはそれ以外にルビはなく、編集者が付した可能性が推測され得る。また、23号付録 p.1にも、読者からの投稿文の一部にルビが見られる。このことから、鷗外の原稿にも同様の処理が施された可能性が全くないとは言い切れないものと思われる。

このような変更箇所を、初出における訳文と比較してみると、面白いことが分かる。初出では、2箇所を除いて、すべて翻訳底本と同じ段落構成になっているのである。たとえば以下の図版に見るように、翻訳底本で3つの段落、初出でも3つの段落、全集版では1つの段落となっている箇所がある。

- 【図 1】 ⑪ *ten stattgefunden hatten!*
Die Ansichten dieser Gesellschaft wurden vollkommen beherrscht von Nikolaus Wedder, einem Patriarchen des Dorfes und Wirths der Herberge, an deren Thür er vom
- 【図 2】 ⑫ *ger Billigung.*
Sogar aus dieser Festung warb der unglückliche Rip endlich von seiner zankfüchtigen Frau gejagt, welche plötzlich in die Mitte der Versammlung hineinstürzte und die

図 1 および図 2 は、鷗外文庫所蔵本の写しである。ただし⑪、⑫は筆者が付したもので、第 11 段落、及び第 12 段落の冒頭部分であることを示す。ページは、本論文冒頭で示した鷗外文庫所蔵本の、それぞれ S. 62 と S. 63 である。

この翻訳底本に対する鷗外訳を、少年園版と全集版で対比する。

- 【図 3】 【図 4】 【図 5】 【図 6】

⑪ この會議の首座しよざでうの意見を支配して居たのは、村らう、この既に二三月前に済んだ問題に就て!

い小男です。聴く人は紙上の政治問題に就いて、まあどんなに賢く議論をしましたらう。この既に二三月前に済んだ問題に就いて。この會議の首座で、その意見を支配して居たのは、村の故老で、宿屋の主人ニコラ

⑫ 不憫なリップリップは、此岩イサノからさへ彼喧嘩好きの女房メノに

い烟カミに鼻のあたりで環を書かせ、物體らしく顔カハいて、その腹からの大賛成を表します。不便なリップは、此岩からも、彼喧嘩好きの女房に逐はれました。彼女房はこの平和な集會に突然駆け込んで、誰彼の嫌なく、

図 3 は『少年園』に掲載された訳文の写し（一部）である（第 14 号 p. 16）¹⁷。但し⑪という数字は筆者が付したものであり、翻訳底本の第 11 段落の冒頭部分の訳に相当することを示す。

図 4 は同じ箇所の全集版（p. 171）である。『少年園』版では、「この會議の首座で……」のところで改行されているが、全集版では改行されていないことが分かる。

図 5 は『少年園』の写しで、⑫は筆者が付したものである（第 14 号 p. 17）。

図 6 は同じ箇所の全集版（p. 172）である。『少年園』版では、翻訳底本の改行に対応して「不憫なリップは」で改行しているのに対し、全集版では改行が見られない。

結局、翻訳底本および『少年園』版では、第 10、11、12 段落の 3 段落に分かれた構成になっているところが、全集版では第 10 段落に他の 2 段落が包摂された形になっている。

岩波版全集は、『改訂水沫集』を底本としており、筆者が調べた限り『改訂水沫集』の底本となった『水沫集』（筆者が目にしたのは 1892 [明治 25] 年版）においても、すでに第 10 段落に他の 2 段落が包摂されており、『水沫集』の編集の段階で、『少年園』版の段落構成が変更されていたことが分かる。

¹⁷ 図 3 及び 5 を見て分かるように『少年園』のルビは、漢字の左側に振られている。これは鷗外の翻訳のみならず、『少年園』掲載の殆ど全ての記事に共通する特徴である。

4-3 全集版の省略箇所

初出と『改訂水沫集』所収版の異同については、岩波版全集の「後記」に細かく記載がある。しかし、「後記」における異同の指摘には、多少の遺漏がある。たとえば、初出に存在した訳文が、『改訂水沫集』で欠落している箇所があるが、その点について「後記」には記載がない。

その欠落箇所とは、主人公リップが父祖伝来の農地の保守管理を怠ったことを描写するくだりである。全集版では「……先祖から譲り受けた田は、年々に減って仕舞ひ、今は唯だ些し計りの、蜀黍と馬鈴薯を種付ける畑ばかりが残りました」(p. 170)と記されているのみである。だが、初出ではこの箇所に続いて「この畑さへ何時見ても、村中で一番荒れて居りました」(第13号 p. 12)という描写がある。

初出に見られるこの描写は、『水沫集』初版でも欠落している。つまり「この畑さへ……」という文章は、『少年園』のみに見られ、その後の『水沫集』、『改訂水沫集』および岩波版全集の全てで欠落していることになる。なぜこのような欠落が見られたのであろうか。

以前に筆者が論じたように、鷗外の訳文中には、翻訳底本には存在しない文章を創作的に付加する、ということがしばしば見られた。仮に「この畑さへ……」という文章が鷗外の創作的付加であって、鷗外自身がこれを『水沫集』に再録する際に削除した、という推測も一応は成り立つ。

結論を申せば、この推測は間違いである。なぜなら、翻訳底本において「この畑さへ……」に相当する文章が存在するからである。具体的に翻訳底本を検討すると、そこでは、„... so daß, obgleich sein väterliches Erbgut unter seiner Wirthschaft, Acker für Acker abgenommen hatte, bis wenig mehr als ein bloßer Fleck für Mais und Kartoffeln übrig blieb, selbst dieser der am schlechtesten bestellte Besitz in der Nachbarschaft war“(S.60)となっている(下線部筆者)。訳は「それゆえ、彼の父祖伝来の農地は、彼の代になって1エーカーまた1エーカーと減って行き、残るものといえば、トウモロコシとジャガイモのための僅かな土地のみとなったにもかかわらず、その土地でさえ、近隣では最も手入れの行き届いていない土地であったほどである」となる。ドイツ語底本と初出における鷗外の訳文を対比してみると、selbst以下の文を鷗外が「この畑さへ……」と訳していることが分かる。

4-4 訳文の変更

岩波版全集に注記されているが、全集では「……そして譬へて云つて見ると、石や金でこしらへた彫像の目の様な目……」(p. 176)となっている箇所が、初出では「そしてむかし一目で人を殺したといふ龍の『バジリスク』の様な目……」(第16号 p. 9)となっていて、文章が若干異なる。この部分を底本で確認すると、„... mit so stierem, basilikenartigem Blick... “(S.67)となっている。鷗外が初出段階で、basilikenartig(直訳すると、「バジリスクのような」となる)の訳語として、まず字義通りの「『バジリスク』の様な」を与え、さらに訳注的な説明を訳本文の中に織り込んで「むかし一目で人を殺したといふ龍の」という語句を付加したことが分かる。このような説明的な補足を加えることによって、「バジリスク」の何たるかについて知らぬ少年読者にも十分に意味は通じるようになった筈だが、これを鷗外は『水沫集』再録段階で、「バジリスク」の文字を棄て、より説明的な訳文に変更したことが分かる。

4-5 ドイツ語底本への書込と初出

「新世界の浦島」は『少年園』に全7回にわたって掲載された。その際「新世界の浦島」では、第一回、第二回……という書き方をせず、それぞれ「第一稿」「第二稿」……という記載になっている。こうした初出を、東大総合図書館の鷗外文庫に所蔵されているドイツ語底本への鷗外の書き込みと比較してみると、7回の掲載の切れ目のすべてに関し、切れ目を示す書込がなされていることが確認出来る。念のため、初出と全集版、ドイツ語底本の、それぞれの切れ目を以下に記す。

初出	全集版	ドイツ語底本
第2稿冒頭	p. 176 の2行目「桶を」以下	S. 60 下から11行目” Rip” 以下 →図7参照
第3稿冒頭	p. 173 の2行目「ある秋」以下	S. 63 下から6行目” Bei” 以下
第4稿冒頭	p. 176 の2行目「桶を」以下	S. 67 上から4行目” Wie” 以下 →図8参照
第5稿冒頭	p. 178 の11行目「リップ」以下	S. 69 下から3行目” Er” 以下
第6稿冒頭	p. 181 の6行目「王さまの」以下	S. 72 下から5行目” Hier” 以下→図9参照
第7稿冒頭	p. 184 の15行目「この時」以下	S. 75 最終行” Man” 以下

【図7】  Rip van Winke war indessen einer jener glücklichen Sterblichen, jener thörichten, gutgeölten Charaktere, die es mit der Welt leicht nehmen, Weiß- oder Schwarzbrot essen,

【図8】  Wie Rip und sein Begleiter sich ihnen näherten, hielten sie plötzlich mit ihrem Spiel inne und starrten ihn mit so fierem, basillistenartigem Blick und so eigenthümlichem,

【図9】  Hier brach ein allgemeiner Lärm unter den Umstehenden aus. — „Ein Tory! ein Tory! ein Spion! ein Flücht-

第2、3稿冒頭に相当する底本には、単にカギ印が付されているだけであるが、第4、5稿に相当する部分では「才四稿」等と記され、第6、7稿に相当する部分では、単に「六」等と漢数字のみが記されている。

5 初出「戦僧」と全集版の対比

5-1 ルビについて

「新世界の浦島」同様、「戦僧」も、初出と全集版ではルビの使用に差異が見られる。たとえば、「戦僧」の冒頭部分を比較すると、以下のようになっている。

全集：「誦經聲歇みしとき、新に獲たる俘虜を戦僧の前に牽き据ゑたり。」(p. 159)

初出：「誦經聲歇みしとき、新に獲たる俘虜を戦僧の前へ牽き据へたり。」(第10号 p. 13)

全集版には全くルビがない。実は「戦僧」全体にわたって、全集版にはルビがない。これに対し初出である『少年園』版には、かなりルビが使用されている。「新世界の浦島」(新浦島)の場合、初出にも全集版にも両方ルビの使用があり、それがかなり異なっていたため、本論文で6つのケースを示したように、相違が複雑であった。それに対し「戦僧」の場合は、全集版でルビが全く使用されていないため、場合分けの必要がない。

「新世界の浦島」の場合、『水沫集』に再録され、それが『改訂水沫集』をへて全集版となった。「戦僧」の場合もほぼ同じだが、『少年園』第10号(1889年3月)のあと、いったん『柵草紙』第21号(1891年6月)に再録され、その後『水沫集』、『改訂水沫集』、そして全集版に引き継がれた。ルビは『柵草紙』において既に全て欠落している。

5-2 訳文の変更

上に示した「戦僧」冒頭の訳文において、全集版の「前に」、「据ゑ」が初出では「前へ」、「据へ」になっている等、ルビ以外にも仮名遣いが異なるケースが見られる。こうした些細な差異は、全集版「後記」ではいちいち指摘はないが、全集版「後記」で指摘されているほど大きな訳文の差異も見られる。

具体的には、全集版で「……佩びたるカタルニヤ刀の柄と短銃の把と其間より露れたり」(p. 160)となっている箇所が、初出では「……佩びたるカタロンニヤ刀の柄と短銃の把との、其間より露はるゝは、山陽外史が襟呟甲観といひし様にも似たらんかし」(第10号 p. 14)となっている(下線はいずれも原文のまま)。初出では「山陽外史」云々の説明が加わり、頼山陽の文言とおぼしきものが紹介されている。「襟呟甲観」の出典や意味内容について、筆者は現時点で解明出来ていないが、当時のエリート少年読者にとって、異国の事柄の譬えに頼山陽の文言を

引き合いに出すことにより理解が深まる効果があると鷗外は考えた可能性がある¹⁸。

なおこの「山陽外史」云々は、もちろん鷗外の創作である。当該箇所は、鷗外の翻訳底本であるドイツ語版では、*„...erblickte man den Kolben einer Pistole und den Griff eines katalonischen Messers“*¹⁹となっていて、「ピストルの床尾とカタロニア式の小刀の柄が見えた」という意味、すなわち全集版の訳に近い。おそらく鷗外はこの翻訳を再録するに際し、西洋文学の翻訳の中に山陽云々の文言を入れることが妥当でないと判断したものと思われる。

6 おわりに

本論文では、鷗外の翻訳二篇の初出が少年向け雑誌『少年園』に掲載された点に着目し、鷗外が少年向けの訳文にどのような工夫を凝らしたのかを解明しようとした。『少年園』に掲載された記事を読むと、同誌の読者が明治中期のエリート少年少女であったことが推測され、その点で鷗外が、難解な漢字・漢語を心置きなく多用する一方、これとは逆にルビを使用することにより、漢字・漢語を得意としない読者に対しても配慮を行っていた（あるいは教育効果を考えた）実態が明らかになった。こうした配慮は、二篇の翻訳が次の版に再録される際に、かなり消失してしまい、結果的に全集版で鷗外訳を読む場合と、初出で読む場合では、若干印象が異なる結果となったものと考えられる。

本論文においては、初出と全集版の対比が眼目であったため、「戦僧」に関して、その書込や誤訳（というより錯覚）を指摘することは敢えてなさなかった。この点については、別稿を草して論ずる予定である。

【付表等】

《少年園の発行年等》 1888年＝明治21年。下線を付したものは、鷗外の翻訳が掲載された号。

第1号 1888年11月3日	第2号 同年11月18日	第3号 同年12月3日
第4号 同年12月18日	第5号 1889年1月3日	第6号 同年1月18日
第7号 同年2月3日	第8号 同年2月18日	第9号 同年3月3日
<u>第10号 同年3月18日</u>	第11号 同年4月3日	第12号 同年4月18日
<u>第13号 同年5月3日</u>	<u>第14号 同年5月18日</u>	<u>第15号 同年6月3日</u>
<u>第16号 同年6月18日</u>	<u>第17号 同年7月3日</u>	<u>第18号 同年7月18日</u>
第19号 同年8月3日	<u>第20号 同年8月18日</u>	第21号 同年9月3日
第22号 同年9月18日	第23号 同年10月3日	第24号 同年10月18日

《「新浦島」に関する筆者の既発表論文》

- ・鷗外訳「新浦島」に見られる翻訳技法（1） 底本の語順をどう邦訳に生かすか
大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト2013 言語文化の比較と交流 1』2014年5月31日（31-40頁）
- ・鷗外訳「新浦島」に見られる翻訳技法（2） 過去形の羅列を避ける技法
大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト2014 言語文化の比較と交流 2』2015年5月30日（17-26頁）
- ・鷗外訳「新浦島」に見られる翻訳技法（3） 異文化理解と文化変容の観点から
大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト2015 言語文化の比較と交流 3』2016年5月31日（17-25頁）
- ・初期鷗外の翻訳に見られる創作的付加について 鷗外訳「新浦島」における主人公への感情移入
大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト2016 言語文化の比較と交流 4』2017年5月31日（1-10頁）

¹⁸ 『少年園』の広告欄には、しばしば各学校の入試案内の広告が掲載されているが、たとえば明治学院の受験広告においては、予科一年の入試科目に関し「十八史畧講讀他ニ試験ヲ要セス」（第19号広告 p.1）と記されていて、漢文の知識がいかに重要であったかがうかがえる。

¹⁹ Daudet, Alphonse, *Der Feldprediger*. In: A. Daudet, *Aus dem Leben*. Deutsch von Dr. Adolf Gerstmann. 2. Aufl. Dresden & Leipzig, Verlag von Heinrich Minden. 1886. S.91. この版本の複写は、鷗外文庫より入手した。